

ポジショナーのお話

患者に聞かれて答えてきた質問集。

✦ どんな効果を狙っていますか

ポジショナーは、等尺反射を利用して身体全体の安直姿勢を、リラックスした状況を作り出そうとします。

✦ このリラックスとはどんな意味を持ちますか？

等尺反射が全身にいきわたらすことを狙う事で、筋のスパズム（痙攣）を取り除こうという性質が期待できます。

✦ 筋のスパズムは何が問題なのでしょ
うか？

例えば、この筋スパズムにより身体は、安直姿勢の維持を、所々、筋拘縮という現象で支える事を起こします。これが、筋を堅くさせ、筋の柔軟性を損ねる可能性があります。

✦ この筋の柔軟性を損ねる事が何の問
題が起こるのでしょいか？

例えば、この柔軟性が損なわれる時、身体には痛みという現象を伴い、結果、これが、日常生活に大きな支障をきたす事があります。

✦ どんな症状があるのでしょいか？

例えば、首の痛み、頭痛、肩、背中、腰、ひざ等、顎への障害、痛み等々ですが、少しずつ紹介してみたく思います。歯で言えば、原因不明の歯痛などもあるかと思えます。現在、HPの構成上、紹介できる範囲でしか今の所、紹介をするつもりはありません。どうか、ご理解ください。

✦ 何故、歯科治療でそれが、落ち着くので
しょいか？

それは、この等尺の時間変化を顎が一番

『与太夜な話』

あるダンスを職業とする二人のお話

ダンスを職業とする方を見たことがあります。この職業は、一番は、バランスのコントロールと筋の柔軟性と、僕は、勝手ながらに思っています。面白いもので、こういう出会いは、何故か相手がせつぱつまっている場合が多いみたいで
す。

一人はアメリカのオーディションに受かる為にぶれたバランス感覚を取り戻すことでした。

一人はスペイン講演を成功裏に終わらせる事が目的でした。

渡された期間は3週間と、10日間。一つは、バランスよく回転できる軸を取れやすいように筋をコントロールしました。一人は、疲労が回復しやすいようにコントロールしました。何をしたかと言えば、筋の拘縮が起きにくいようポジショナーに等尺反射が全体にいきわたるようにコントロールしてみただけです。

アメリカのオーディションは無事に終わり、更にラスベガスで二年の契約を結び、更なる活躍をされているみたいです。二年後の報告を楽しみにしています。

スペインは大成功に終わり、今は身体のメンテナンスに定期的に職業上の維持の為に来られています。

しかし、ダンスというスポーツを職業にされる方と言うのは、こども腰や、膝、背中、肩、首に無理をかけるものかと正直驚いた記憶があります。身体の強張り
は実は、三回ほどで落ち着きました。今は、当院では、基本三回の調整を一つの目安において、治療をしています。

これは、治療期間を、回数を少なくするのは、患者にとり尊重されるべき物と考えるからです。

健康への投資が成功へ導いたお話でした。

影響を受けやすいからと考えるからです。

具体的にはどういう事を指していますか？

今回はいくつかの現象を書くだけで、ご容赦ください。

例えば、思いつきり首を左に傾けてください。すると、左側が強くなりませんか？（もし、違う現象を感じられた場合、咬合様式に問題があります。その場合はどうぞ、分られる歯医者さんにご相談ください）右側もそうです。前、後ろでも構いません。

しかし、問題は、日常で、軽く歯を触れ合った場合、全体では無く、部分しか当たらない方々がいます。

全体を当たらせる為には、無理な力を本人が働かせて噛んでいる場合すらあります。

問題は、その力を無理な物と、あなたが感じているかどうかでしょうが…

さて、安直姿勢が、変に歪むような形であればどうなるのでしょうか？

残念ながら、歯はその姿勢に影響を受ける形で、その状態は時に悲しい状況になるという言い方が出来るかも知れません。もしかしたら、この重心と言う変化に対応すべく、顎は揺らいでいるという言い方が出来るかも知れません。そして、この揺らぎが、歪みに変わる場合、その等尺活動においては、どうしても筋スパズムや、筋拘縮を起こして、対応する事になるようです。



保険適応ですか？

保険制度は一九六〇年代に完成したものです。病態自体、そこまで、分って作られた物ではありません。そして、そこまでの対応を考えて作られた物ではありません。ですので、保険外診療になります。

『与太夜な話』

頭痛持ちのお話

頭痛という代物は、正直嫌なものです。この存在が無くなれば、どんなにいいだろうと思うのです。薬局に行けば、たくさん頭痛に関連する売薬が売っています。頭痛外来などもあるぐらいです。

ある時、看護婦さんと酒を交わしたことがあります。飲みながら思わず吹き出してしまいました。「私、鬱病なの」明るく飲み交わして交流を深めていたのが明るく言われました。「この頭痛が出ると、もう最悪。死にたくなるの。」驚きと絶句です。「精神科に行っても、心療内科に行っても、つい最近ね、いわれたの。あなたはボーダーです。解決も何もないの。この苦しみは多分誰にも分らないと思う。」思わず、彼女の二の腕のバンソコに目が行きます。「死なない程度にやっちゃった。」笑いながら、酒を勢いよく飲みほします。

ふと思いい出します。「何が良かったって、あの頭痛が嘘のように消えた事。」治療が終わった患者から言われました。「何が良かったと言えば、生理ぐらいでもう痛み止めは飲まなくなってきたいる。」治療の終わりに近付いてきた患者の声です。「確かに寝込まなくなってきました。前は、毎日だったけれど、今は、週二回まで減った。」治療開始した患者の声です。

頭痛と鬱の声をそう言えば、この患者達が一生懸命訴えていた事を、思い出します。歯科治療で鬱や頭痛を狙って治す事はなく、ただ、等尺関係を筋が復活するように環境を作っただけなのに…僕は歯科医ですから、他領域の治療を引き受ける事は出来ません。

顎の等尺を作る身体との時間軸のずれが、そんな影響を渡すのだろうか…？ついつい悩みが深くなり、思わず、酒を飲みほします。彼女のバンソコを見つめな

何故、保険適応ではないのですか？

これは、国が定めたルールだからです。歯科の場合、新しく見つかる病名や治療法においては、保険適応から外れる事が決まり事になっています。インプラントと同じように、矯正と同じような目で捉えていただければ良いかと思えます。これ以上は、私自身も説明のしようがありません。申し訳ないです。

費用は、いくらかかりますか？

基本料として、消費税は別に、現在二十万円頂戴しておりますそれと、一回あたり七千円頂戴しております。ざつと言うと、こういう表現になります。細かくは、診療の際、お尋ねください。

高くはないでしょうか？

安い治療費とは言えないかも知れませんが、しかし、保険が利かない事。そして、身体が健康になる事を考えられた場合、逆に高いと言えるのでしょうか？ご自身への投資と考えた場合、可能性を買えると思えば、高い買い物ではないと思えます。どうぞ、資本主義です。他院と比較されてみてください。もし相場があるとすれば、相場に頑張った設定である事も知っていただきたく思います。

お金を出す勇氣がありません。騙される事も考えると…

この治療には、体感と言う物があります。あなたの身体に、等尺環境が整うと何が起るか、実際に体験をする事が出来ます。その中でお考えになれば良いというのが、当院のスタイルです。説明会などと言う物も、体験報告会と言う物も、特に用意する必要を感じません。医療である以上、正直な身体の変化が全てだと思っています。生きる術を医療行為からそして、患者の病態からの解放より得ております。私どもは

がら、思わず思い出されます。「何、よこしまな事を考えているの？」茶目つ気たつぷりに彼女は、私をこぼきます。「な、分けないだろう。」「いいのよ、口説いても。その代り、後で高くつくわよ。」笑いながら、優しく人の顔をつねります。まるで兄弟のようだと思いがら、ふと、我に帰ります。

「おまえよ、死のうとした割には、横柄な態度を人取るよな。」何故か、涙腺が中年になって弱くなったのか、目に湿り気を感じます。それを、悟られまいと、こちらまで、横柄な言葉が出てしまいました。

「いいじゃん、いいじゃん。それでこそ、酒飲み会話よ。盛り上がるうよ。」

一瞬、戸惑う僕がいました。そして、思わず吐いてしまうのです。

「よう、お前よ。マジな話、何で死ぬと思うのよ。」

笑っていた顔が瞬間的にひきつりま

す。「あのね、鬱病って、診断されているけれど、マジな話、私鬱病何てこれっぽちも思っていないの。」

「何だそれ。」

「あのね、まずね、頭痛が来るの。すると、踵頸リンパ節が腫れて来て、動けなくなるの。逆の場合もあるけれど…」

「お前、仕事はどうするんよ。」

「あたしね、医療の仕事好きなの。だから薬がばがば飲むの。で、働くのよ。これでも、白衣の天使よ。」

「ノンベイがどの面下げて言うんよ。」言っちゃったと後悔しながら、心では酒のせいだよなど、一生懸命言い訳をしている自分を感じ相当、焦っていました。すかさず、ええい、ままよと、勢い付けて話しかけた。

ですから、体感より考えていただくと言う方法を、好んで提供しております。多くの患者にも社会的にも認知されていない分、今はやむを得ないと思っております。ですが、それをいい事に、先にお金、宣伝ありきというあたかも商売優先のような集団とは、一線を置いて、取り組んでいるという事も知っておいていただきたい思います。患者の無知を利用したくはないと思っております。むしろ、体感よりまずは考えられて頂きたく思っております。

✦ いつまで、体感という提供をされるつもりですか？

少なくとも、私自身が、納得するまで。あるいは、飽きるまででは無いでしょうか。こんな表現で納得してください。

今は、学会への科学性に基づく発表の為、緩やかに用意をしている段階にしか過ぎません。詳細を書きたくありません。ですので、かいつまんで…科学性を出す事を、相談した際に求められ、もう少し、煮詰める事を求められました。インパクトが大きすぎると…

✦ 次に、お伺いしたい事があるのですが…

それは、またの機会に。HPの完成度に合わせて出していきたいと思えます。

『与太夜な話』

頭痛持ちのお話 続き

「お前、動けるんか。それに、肩や腰、背中、どえらいつらいと違う？冷えと、しびれも、何気にあるだろう。」勢いに任せて、彼女の手を取り、脈を測る俺がいた。

「よく、そこまで分かるじゃん。」

「まあな、一応、これで喰っているからな。」

「でも、その脈に取り方って…」「ああ、これ、漢方医から習ったの。東洋医学で見る症の取り方っていう奴らしいよ。一応、診断する際の、参考になっているの。」

「ふくん。しかし、あんたも変な歯医者ね。」

「違う、ドクターと呼べや。」

茶化すように、舌を巻き舌にしながら、外人さながらに「ドクター」と、彼女はふざけて俺の事を指差した。

「でも、すごいね、内科に行っても、精神科に行っても分つてもらえなかったよ。というか、そんな所まで見抜けなかったよ。」

「うまく言えない。でも、もしかしたら。俺のジャンルの仕事のよう気がする。完治させるとかは、俺のジャンルじゃないから言い切る事は問題あるかもしれないけれど、多分、元気にさせられると思うよ。」

「あのね、聞いてくれる。」一瞬、素の声に変わったのが分かった。

「口説かれる気はないぞ。」本当に、俺っていう奴は、デリカシーのない塊だ。

「このバカたれ。一度、死んでこい。」
そうそう、こんな減らず口の方が、何ぼ聞いていて楽なことか…でも、すぐに素の声に戻った。

「あのね、本当に動けなくなるの。身体中、普段も痛いんだけど、まだ、これぐらいはどうつて事無いと、患者を診る時は思うようにしているの。」

「そうなるな。」
「家族に言っても、このつらさって、分つてもらえないの。」

「だろうね。」こんな言葉が自然と出るのは、妙に驚きだった。確かに、俺、そんな患者と対峙したし、今も対峙しているものな…な、事あるのか、そこから始まり、あると思おう、じゃなければ、成立しない。患者の声を正しいと思うようにしよう。そんな事を思ったもんな…そこに行きつかせるのに何年費やしただろう…完治の確立性、確実性は、相当な所まで持つて来ているけれど、果たして、医療に百パーセントはあるのか？今も、これだけが悩みだ。

「ねえ、聞いている人の話。」

「ああ、聞いているよ。聞きながら考えている。」

「そうなの、そして、さっき言った話の続

き、ここが腫れてくると、もう駄目。動きたくなくなるの。」股間を指しながら、正確に言えば、リンパ節なのだが、そして、話が続く。

「今日は、まだましなの。まだ、小指大だからね。これが、もつと大きくなると、本当に身体中つらくて死にたくなるの。」

「それでも、鬱と思う。大体、頭痛が鬱の素である訳がない。挙句には、仕事を休め。いや、仕事を一か月も休めば、仕事したくなるから、そしたら鬱も消えているから。いや、休んではいけません。働いていれば、その内頑張ろうって気になって、鬱も消えているからなんていう事まで言われるの。ひどいと思わない。」

デリカシーのない俺なら、酒の勢いで、ついつい何か吐きたくなるはずなのだが、何故か黙っていた。

「あたし、これでも看護婦なんだぞ。いや、もとい、看護師なんだぞ。自分の身体の事なら下手な医者より分かっているつうの。」

ついつい彼女の勢いに飲まれて、黙っていたが、無造作にグラスに手をかけて、ググイと、ウイスキーを飲みほす彼女が目の前にはいた。

「ふう、飲んだ。」

「ああ。」

「こら、お前も飲み、そして、あたしに酒を作れ。」

「そうだな。」勢いに負けたのか、自然とグラスに手がかかった。

「繊維筋痛症？」

「そう、お前はドクターだ。あたしは、そこを睨んでいる。お前、歯医者のかせに、ドクターか？」

「おいおい、悪酔いすぎるぞ。」俺という勢いは、いつしか、彼女の勢いに任されたのか、僕という感覚に変わってきてもいる。

「年齢ばれちゃうよね。」

「いやいや。」

「ま、いいか。看護婦が看護士になろうと、仕事は変わりはないからな。」

俺、もとい僕は、ついつい新しく彼女と、自分のグラスに氷と、ウイスキーを入れ始めた。

トクトクトくと、心地よい音がボトルから聞こえる。

「おい、飲むべ。」何かを忘れるが如く、弾け始める彼女がそこにはいた。

「お前、悪酔いすぎるぞ。そろそろ、押さえとけ。」

「つらいの。」

「えっ？」

「いろいろな科にはいくの。薬貰わないと動けないから…」

そこには、知り合いと言う関係から、始めて彼女の内面をしまった俺がいた…

「口説く言葉は用意していないぞ。」

顔を思いっきりつねられた。つねるのが好きな女か、空気が読めない僕のせいなのだろう。

「馬鹿、そんな気分じゃないわよ。そんな気分には身体はさせないわよ。酒でごまかしているの。」

多分、アメリカ映画なら天使が横切ったねとこじやれた台詞が出てくるのだろう。ハンフリーボガードなら、黙ってバーボンを洗く飲むんだろうな。しばらくの静寂のあと、彼女が、おでこを小突いてきた。

「おまえ、ハードボイルドか？」

「どうかな。」

「報われんだろ。そんな患者を治しても、世間が認めないならさ。」

「どうかな。」

「何か、考えているのか。」

「考えない。明日は、明日になって考える、それで、いいじゃん。」

何故か知らないが、自分としては不思議とそんなきざな台詞が出てきた。

「この嘘つきめ。」

「…」

「分っているんだぞ、何かとてつもない事を考えている事を。」

「…」

グラスに口が向かう。

「あんたは、本当にハードボイルドね。」

「そんな事、考えた事も無いぞ。」

「ううん、孤高な男って、ハードボイルドなの。」

「そんな、大それた事、考えた事など無い。」

「ううん、分るの。長いものに巻かれようと言う発想持たないでしょう。」

「いや、そんな事無いよ。」

「じゃあ、言い方を変えてあげる。一般常識で患者を診ないでしょ。」

「うん、意味がわからないな、患者を診るのに、常識って何だ？」

「だから、そこよ。あんた、患者が目の前にいて、苦しいと言っているとする。そしてたら、あんたほつとけないから、さっきの脈の取り方覚えたのでしょう。」

「な、カッコいい理由では無いさ。」

「ううん、分るの。私病気のプロよ。死にたいぐらいの想いで生きているの。死ねたら、どんなに楽かって。どの医者も、そこまで関連付けてみてくれなかった。」

「たまたま、酒の力がそう思わせているだけ。」

「違う、このリストカット、別の事を考えたでしょ。」

「言えないな。」

「言いナサイ。」

「歯医者俺が、分る訳ないだろ。」

「そんな事無い。分ったんでしょ。鬱だから切ったんじゃないことぐらい。」

「そうさ。」

「ボーダーと言う事で切った事じゃないぐらいわかるのでしょ。」

「そんな難しい事考えた事無いな。」

「うそ。」

「酒が覚めるぞ」

「また入ればいい。」

「傷付けるかもよ。」

「もう傷付いている。」

バンソコを俺の目の前に見せる。

「軽い感じだろ。」

「そつ、昔は苦しくて思いつきり切った事もあるけど、今回は大したことない。」

「だろうな。」

「分っていたのでショ。」

「まあな。」

「流石、ドクター。」

本当のリストカットなら、手首に包帯がしつかりと巻かれているはずだ。だから、単純に、推理出来ただけだ。

にこやかに、彼女が腕を楽しそうに振りながら、俺の言葉を待っている。

今まで気付かなかったが、その腕には、小さく昔、何かをしたのだろう。いや、何回もしたのだろう。ミミズが這うような薄くなつた班痕がいくつも見えてしまった。何度か飲んでいるのに、気付いたのは実は今回が初めてだった。何かを感じていたが、いつも別的话题で、酒を楽しんでいた。

そう言えば、何故、こんな展開になったのだろう。

「身体がスーって楽になるんだろ。」

言ってしまったって焦ったのか、慌ててウイスキーを口に放り込んだ。

「あたり。何故だか分らないけれど、途中で気がついたの。身体の苦しさが消えて行く感じが一瞬だけど、あったの。」

「つらくなると、時々やってしまう。こんなんでいいのかって…」

暫く時間がたったのだろうか、何気ない間が置かれた後に彼女の言葉が続いた。

「私ね、昔、大病をした事があるの。手術をする騒ぎで、といつても騒いでいたのは家族なんだけれど…いくら自分がつらいつても言っても、分って貰えなかったけれど、手術の方は、みんな心配してくれた。変な話、嬉しかった。友達も皆、頑張られて、心配してくれた。でもね、私嬉しかったけれど、醒めていた。生きるのがつらいつて言っても、分って貰えない。動くだけで辛いつて言っても、寝るのがつらいつて言っても、サボっているだけだと思われていた。どんなに訴えてもだ

よ。でも、手術となつたら、みんなで大騒ぎよ。私、これで死ねればいいと思つた。そして、この身体の痛みが消えると思つたから。身体からこの痛みが消えたら、どれだけ楽だろう。自分の人格がどうか、宗教的にどうか、人としてどうかじゃないの。痛みが消えるのなら、自分自身消すしかないの。ならば、消える為死にたいじゃない。それが一番楽。」

「酒が似合う時間になつてきたな。」

何故か、珍しく俺もウイスキーをグイグイと、喉越しを確認するが如く飲み始めていた。柄にもなく、ウイスキーには、失礼な飲み方だ。

彼女が語つた言葉は衝撃的だつた。ここまでは、記そうとは思わない。ただ、うちの親戚も、じい様もそれで死んでいる……

おれも、気をつけると、親に言われていた。気をつけても病気になる事は仕方がないと思ふのだが……

父親は生還した。物心つかない頃だつたらしい。

痛みで、呼吸が出来なくても家族の理解は無かつた。ひどい時は、自分で救急車を呼んだ事もあるそうだ。

そんな事を唐突に語られ、返す言葉も見つからなかつた。

仕方なく出てきた言葉が、これだつた。センスがないと思つた。

「で、こんな商売を始めた。」

「多分ね……」

彼女も、酒をその唇に近付けようとした。しかし、自分の見せ過ぎた素を打ち消すが如く、ほんのりとウイスキーを舌舐めた後に話題を変えてきた。

「先生はハードボイルドでいいの。しかし、今はハードボイルドでないぞ。」

一瞬、俺は考えた。どうしよう……だけど、付き合う事にした。実際、このつらさを背負う事は、正直つらすぎると今は良く思う。

いつからだろう。琥珀色のグラスを見つめながら、ある家族に何かを言っている自分を思い出してもいた。

「お母さん、一つ理解をしてあげて欲しいのです。」

唐突にある出来事を、思い出した。大学受験前に一人の女の子が来院した。歯が何度も治しているのに、また痛くなつた。だから来た、ま、こんな感じだ。

原因は、経験を積んだせいか、簡単に見抜いた。言うなれば、体感という奴を、ちよつと行つてみた。

「歯が痛くない。」

木訥に彼女がつぶやいた。

「先生、痛くない。また、根つこのやり直しと思つていたけれど、違うの？」

散文的に書くとすれば、つぶらな瞳が、驚きと、神秘的な体験から、戸惑いと恐怖と、期待感が湧き出て来ているのが分かつた。

「あんな、流派と言う事でどうだ？」

ほつとした表情を彼女が見せる。

「流派が違うだけで、こんな瞬間に痛みが取れるのですか？」

「ま、色々あるわな。ただな、根の治療の完成度という点では、おいら自身、個人的には疑問を感じているよ。でもな、今はそこに手を付けるべきではないと思うよ。」

「えっ？」

不思議そうに、顔をかしげる彼女がいた。言葉を仕方ないから続けた。

「もしな、お前さんの痛みの原因が、歯だつたら、こんな方法で治る訳はないと思わない。言い方を変えようか、痛みが消える事はないと思わない？」

それもそうだと彼女は、ようやく落ち着きを見せ始めた。別に、俺は手品師でも、別にペテン師でもない。単なる歯科医師でしかない。

この現象があり得ると納得するには、相当な期間を要した。実際、国家試験で習ったことなど、丸つきり役に立たないことすらある。そう思える時すらあった。試行錯誤の繰り返しと言っても良かったかもしれない。意味がわからない、この訴えをどうして言えるのか？そんな事で悩んだりもした。一人で苦しんだりもした。暇なんて何もなかった。訴えを消化する力も理解する力も何も無かった。ここは、歯医者と言う事を患者さん、あなた知っている？

そう何度、心つぶやいたことか：

内科医や外科医のように身体の事を配慮する、えつ、何か、歯科医とでも思っているのか？俺の常識がおかしいのか、患者がおかしいのか：ヒポクラテスの誓いの意味は何だっけ：とりあえず、真摯に俺の常識が違うとして、相手の言い分を聞くか：

今思えば、随分、偉い人間だったと、心から反省している。

そんな葛藤が何度もあった。

そんな思いを一瞬心に横切らせながら思わずつぶやいていた。

「身体、ぶっちゃけ、つらくない？」

「つらい。」

安堵したのか、繕った声では無い声が思わず、ふっと彼女の口から飛び出た。

「どうつらい。」

断りを入れてから何気に脈を読み始めた。漢方医からコツを学んだとはいえ、実際我流だ。もとはと言えば患者が言う訴えが果たして正しいのかも分らず、困りきって押しかけ弟子のように、ともかく教えてもらったものだ。

「何度も症をとれ。その内、歯科医と言え見えるはずだよ。別に、薬出す訳では無いから、問題ないだろう。ようは本当かどうか知る事が出来ればいいのだから。」そんな無責任とも、励ましとも分らない単純すぎる言葉を信じ、いつの間にか、何かを感じるようになっていた。別に目安を知ればいいから、今

は恥も無くとりあえず、感覚が訴える時に取るようにしている。

「お前、疲れやすいだろう。」

「あたり。」

こんな横柄な言葉を使う事自体、正直、問題とも思う。決して毎回では無い。だけれど、一瞬とはいえ緊張感が解けた彼女の心を一旦解放したとでも言えば良いのだろうか？その感覚を維持したまま、問診をしたく思い始めていた。だから、べらんめい調でそのまま進める事とした。

「しかし、あれだな、腰ある気がする。」

「あたり。」

「膝は？」

「ある。」

「しょっちゅうとは思えないが：」

「たまに。」

「背中？」

「ある」

「首、肩？」

「ある。」

「動くのかったるいだろう」

「かったるくなつた。」

「でも、動ける。」

「そう、カッターイけれど、動いている」

「その前後だろ、この歯おかしくなつて来たの？」

「あたり。」

「何年、そんな感じ？」

「二年間」

「ずっと、疲れている感じ？」

「こくりと頷く彼女がいた。」

「そうか：」

しばらく考え込む俺がいた。

「だんだん悪くなっている感じ？」

「だんだん悪くなっている。でも、どうしていいか分らなかった。誰に相談していいのか、どうすればいいのか。病気じゃないと医者には言われた。でも、悪くなっている自分を感じた。誰も理解してくれない。」

「で、今日どうして来たの？」

「…」

「何か期待していた？」

こくりとうなずく彼女がいた。

「歯が痛くて、とりあえず来てみた。何かあるかとも思ってた…」

「期待に答えたかな？」

優しく頷く彼女がいた。

そして、両親が来る事を即した。この病態を、親としてどう考えるか聞く為だった。サボっているわけでは無く、ぼけーっとしているわけでは無く、つらくて疲れてそうせざるを得ない事を、伝える為だった。

「そんな事があるのですか？」説明後に母親から飛び出した言葉だった。

「この子の未来を、ご自身達がどうお考えになれるか、言い方を変えれば、病気で苦しむ事が、経済活動すべき社会人になった際、どれだけの損失か被る可能性があるかを、お考えにならない事かと思うのです。私のお伝えすべき事は、これだけです。」

「勝手に治る事はないのですか。」

「残念ですが、そうなる確率は難しいものと今は、判断された方が賢明と思います。」

「あんた、実際どうなの。」

「だんだん悪くなっている。」

「本当なの？」

「二年間だんだん苦しくなっている。」

「何で言わないの？」

「分ってくれると思わなかった。」

「言ってみなければ分らないでしょう？」

「伝えたよ。医者に行けって言われて、何もなかったと伝えたら、気のせいだから頑張れって、言われた。病も気からだから、気持ちをしっかりと持ちなさいと言われたよ。」

はっとした母親の顔がそこにはあった。何

か、心当たりがあつたのだろう。結局、この子を俺は引き受ける事になった。

結論を言えば、二回で良くなった。一ヶ月だった。要した期間は。たまたま手当のタイミングが良かったからだとは今は思っている。しかし、身体を維持する力は残念ながら今はなく、その理由は、その維持に関わる咬合における等尺性が完全に壊れているせいだといえる。その完治の為、矯正という治療に今は入っている。

大学も受かり、運動系のクラブをやり始めている。身体が調子よいせいか、この三か月、キャンセルばかりしている。

学生故、大目に見るが、久しぶりに見た際は、大分崩れて来ていた。本人、その際は自覚が無かった分、助かったが、相当に焦って、次の処置を行った。

「頭痛は？」

調子が維持しているような事を云いな。がら、あつと、いう顔を奴がした事を、見逃さなかった。これだから、時にガキは困ったもんだと、心の中で苦笑いをしてしまった。

俺もいい加減な学生だったし、人の事は言えないわな。やれやれと、思った事を思い出しながら、何故か、ふっと、口角が緩んでいた。

「おい、聞いているのか。」

「えっ？」

そうだった、飲み席だった。そうだ、なんで、自然と辛いと思つたか、いつのきっかけかは分らないが、自然と思つた瞬間の出来事が走馬灯のように過っていたのだ。

「聞いているか、ハードボイルドじゃな

いぞ。何が、足りないんだ？」

いたずら娘のように、小悪魔的笑みで聞いてきた。無性に、いたずら心が湧いてきた。

「バーボンだろ？」

「そう、バーボン。ハードボイルドはバーボンじゃなきゃ。分かる。それなのに、なんでウイスキーなの？」

「バーボン飲んで、バボーンてっか？」
思わず笑う彼女がいた。

「そうよ先生、先生はそうでなきゃ。」
よく分らないが、褒められた俺がいた。

「私鬱で苦しんでいる方の本を読んで、同意した事があるの。」

唐突に話が元に戻ったようだ。そして、話が続いた。

「誰にも分らない苦しみて、相当な孤独なの。」

これが、その日一番最後まで尾を引いた言葉だった。そして、俺達は分れた。

「多分、そのジャンル、俺の仕事のようなきがするよ。」

「じゃあ、口説いてよ。」

「ホテル行くか？」

「危険な情事の口説き文句としたら、最低ね。」

「多分、僕が見ているような症状のような気がする。」

「あたし、顎関節症もあるって。」

「なら、なおさら、俺の仕事じゃない？」

「じゃあ、口説きなよ。」

「Hすっか？」

「だっさ、そんなんで、口説けると思っているの？」

「多分、おいら力になれるかもよ。」

「口開かなくなった事もある。」

「結構、いけているみたいよ。そういう

の。」

「じゃあ、口説きなよ。」

「チョメチョメすっか？」

「古い、って、それが、分る私も。いやね、年わかっちゃうじゃない。」

そんな会話が所々にありながら、乾杯をして僕たちの飲み会は終わった。

帰り道、ふと、自分が今まで手掛けてきた俗にいう、完治と言う奴を思いだしていた。目の前の患者の事で、いつも、多分、必死な僕は、成功体験などほとんど思い出した事が無い事も、改めて気付く事になった。

それは、ある歯医者からの友達から見せられた一通の手紙だったように記憶している

〇〇君へ

〇〇君が紹介してくれた、こすが先生ですが、果たして僕は彼に、自分の身を預けてよいのでしょうか？

この件は、彼には内緒にして欲しいのですが、彼が肩こりや首のこりを瞬時に取り除いてくれた事は、驚きでした。驚きのあまり、頭痛が消えたように思えてなりません。

事実、あの後、彼が言ったとおり、首や肩からは痛みが取れていました。しかし、頭痛はすぐに戻って来ました。そして、しばらくしたら背中中の痛みも戻りました。

二、三日たったら、全ては元のままです。ネットかを見て調べても、何とはなく首と肩はそうかなって思えるのです。背中まではあるのかも知れません。

でも、そういった事を矯正で取れるとは一言も書いていませんでした。

普通の矯正は、彼は手掛けた事があるのでしょうか、私のような不定愁訴を矯正で

治すという事は、彼にとつても始めての事はないでしょうか？

また、今ならなんとか、痛みに耐え、働いておりますが、それが悪化するのならば、何もしないという事が良い気がするのですが、〇〇君はどう思いますか？

そんな手紙を、友人の〇〇より見せられた記憶が何故か思い出された。

こすが実際、どうなんだろう。

そんな不安そうな声が〇〇から、こぼれてきた。

「〇〇よ、思い出してくれや。お前さんも、横で聞いていたでしょ。痛みを取るのには、三ヶ月ぐらい頂ければ大丈夫でしょう。上手くいけば、二カ月以内で、いけると違えますか、そういう話をしたと思う。しかし、もし、ある程度完全に抑えるとなれば、崩れた咬合条件を再度、与え直さなければ難しいですよ。その為の方法論は、矯正を主体に考えるべきですよ。と、一応は手順を追って話していた事を、お前さん、聞いていなかったのかい？」

「でもさ、うちの身内、すごく心配している、それは、分って欲しい。」

「分るよ。」

「なら、どうすればいいと思う？」

「それは、分らんよ。まず言える事は、医者に行っても改善や、良くならなかった、そうお前さん、僕に言わなかった？」

「そう、そう言ったよ。夜も眠れないくらい苦しい。頭が痛くなり、家族の未来を考えると、苦しくなるって。気持ちいけどんどんブルーになるって。」

相当大事な、身内なんだなっていうものは横柄な〇〇からは意外な側面を見せられた気がした。

思わず言っていた。「まあな、あれだ。も

し、自分が経験した事のないような症例だったら、友達が故、どうする、かけてくれる、そこまで話すと思う。でも、多分、自分が知っている経験の方が、彼の症状より重いと思う。だから、いけると思う。こんなんで、駄目か。それとも、根拠を、もう少し話そうか……」

今思えば、随分軽々しい言葉を言ったものだ。いくつもの自分の見た目、力のなさに、何度、悲しい思いをさせ、何度悔しい思いをしたことか……絶対に、舐めてかかったら、あかん、常々そう言い聞かせるようにしている。

結果、予定通り完治をして、今は楽しく海釣をするまで回復したものだからいいものを。もし、彼のカンの方が当たっていたらと思うと、ぞーっとする……

あの当時は、小僧の域を、まだまだ解脱していなかったと、今更ながらに思う事がある。別に症状を思い出しても仕方がない。頭痛が治ったから、別にそれに伴う症状が消えたから、それで良いとすら思っている。

しかし、頭痛と言うのは、本当に厄介と思う。死にたくなる気持ちを、想像すると、とてつもないものに患者は耐えているのだと思える。だから、軽々しく経験を誇る事など出来ない事を今は、前にもまして思うようになっていく。

何故、歯科治療で治ると言えるか、あるいは、言って良いか、正直、ずーっと別の意味で頭痛のもとだった。

そんな意識も無く治ったりしてくれる事があったものだから、相当地に混乱していたのだろう。当時の僕は。

今なら少しだけ言っただけ良い気もしている。

頭痛治しちゃった、イエイ！

とまでは言えなくとも、歯科が担当すべき頭痛は治る可能性を、持っていますよって。小声ながらに、伝えたくなる時がある。

そして、今は絶対に、イエイーというエネルギーを出したくもないし、持ちたいとも思わなくなっている。そして、勿論、全ての頭痛を治せるというつもりなど無い。多くは、医科の担当だろう。

唯、医者にも治せない種類の頭痛があるよ。うだと、この頃は思うようにもなっている。ま、そんな話も、また、どっかで出来ればと思っっている。

あ、そうそう、飲んだ彼女の話の一つ。リンパ節が腫れて、頭痛が起きると、次に息が出来なくなるって言っていた。

そして、連絡がきた。

入院したと：

息が出来なくなったと：

心臓がおかしいと：

だから、連絡を待つ事とした。

飲んでいる席、思わず人が良いのか、ドクターの声に調子こいたのか、ハードボイルドという響きに、妙に納得したのか体感をさせた。

「どう、肩、首。楽？」

「うん。」

「リンパ節触ってみな。」

「あれ、痛くない。」

「息は？」

「出来るよ。空気が入ってくる。」

「良ければ、連絡せいや。毎日、当直じゃ

ないし、明けの日は休みの時もあるじゃろ？」

「口説かれてみようかな。」

そして、今は、連絡を待っている。

こんな所で、今回のお話はおしまいにしたく思っています。さて、どこまでが真実で、どこまでが作り話でしょう。

歯医者さんの常識なら、全てウソ。作り話に終わるでしょう。もし、この話が、全て事実なら、とんでもない事かもしれませんが。何故か頭痛というキーワードで、書きたくなって、頭をよぎった思い出話か、空想話か、どうぞ、そのご判断はお任せしますが、ま、そんな事を記してみました。

咬合病、顎関節症、いわゆる顎関節症、慢性疲労症候群、繊維筋痛症、果たして何が主にかかわっているのだろうか、この頃とみに思うようにもなっております。

骨の病気なのか？

ウイルスなのか？

自己免疫疾患なのか

筋の病気なのか？

あるいは、筋が関係しているのか？

骨が主体なのか？

多分、おいらは、何かを感じて来ているのだからなあって思う時があります。言葉に出来る準備を一生懸命しつつ、今回の与太夜な話は、お終いとします。

また、いつか。

あ、そうそう顎関節症は、どうしても熱く語れそうにありません。

いわゆる顎関節症という世界からかと思
います。語るとしたら。

世の中の顎関節症という、もしかしたら、
空になり始めている概念が、ダイナミック
に変わるまで、おいらは、空想話でも入れ
て行こうかと思っております。

んじゃ、元気で。